

Title	第13回母子手帳国際会議
Author(s)	小松, 法子; 柳澤, 沙也子
Citation	目で見るWHO. 2023, 83, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91194
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第13回母子手帳国際会議



創価大学看護学部

小松 法子

看護師として病院で勤務をした後、JICA海外協力隊としてタンザニア連合共和国に派遣。帰国後、2015年より現職。



長崎大学生命医科学域(保健学系)

柳澤 沙也子

看護師として病院や高齢者施設にて勤務した後、JICA海外協力隊(インドネシア共和国派遣)等を経て2021年より現職。

日本発、世界に広がる 母子手帳

母子健康手帳(以下、母子手帳)は、妊娠中の母体と胎児、出産時とその後の母子の状況、そして子どもが6歳を迎えるまでの健康を記録することが可能です。母子手帳は日本の発明品のひとつです。きっかけは、第二次世界大戦中でした。戦時中に母親の命を守るための妊産婦手帳が作られ、戦後の1948年に世界で最初の母子手帳が作られました。戦後の日本において栄養失調や感染症により次々と子どもたちが亡くなる中、新生児や小児の成長を守ることに焦点をあてた手帳です。現在、日本の母子手帳は、10年に一度、全国共通のページの省令様式全体を見直されており、次回の改訂に向けた実態把握が行われています。

第二次世界大戦後の日本のように、世界では今も多くの妊娠中または産後の女性や子ども達が命を落としています。日本発の母子手帳を世界に広げ、活用していくことで、助かる命があります。現在、母子手帳は日本のみならず、現在50か国以上の国や地域で活用されています。母子手帳国際会議は、母子手帳を世界に発信し、世界各国の母子手帳を用いた取り組みを共有することを目的に実施しています。第1回母子手帳国際シンポジウムは、母子手帳開始50年目にあたる1998年に、東京にて開催されました。その後、近年では2年に1回のペースで母子手帳国際会議を開催しています。

2018年にはタイ・バンコクにて第11回母子手帳国際会議を開催し、母子手帳を活用している施設見学や、母子手帳に関する研究発表等を通して各国の経験を共有しました(詳細は『目で見るとWHO2019年春号』をご参照ください)。2020年はオランダ・アムステルダムにて開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の影響により、対面開催は困難となりました。1年延期後の2021年に、オンラインにて第12回母子手帳国際会議を開催しました。第12回母子手帳国際会議は4回のウェビナーシリーズとして、コロナ禍における世界各国での母子保健の現状について報告しました。母子手帳アプリを用いた情報提供や、オンラインでの母親学級開催等、多くの国でコロナ禍においても母子手帳が活用されている様子が発表されました。

第13回 母子手帳国際会議の概要

2022年8月24日、25日の2日間にわたり、「私を可視化する」のテーマのもと、第13回母子手帳国際会議を開催しました。(表1)開催地はカナダ・トロントです。COVID-19による人の移動が徐々に再開されてきた中ですが、移動の制約がある場合も少なくないことから、対面とオンラインのハイフレックス開催としました。開催にあたり、2021年11月に運営チームを発足し、約1年の間、毎月オンラインでの会議

を行いました。主催者のカナダ・トロント大学のShafi Bhuiyanさんや、第12回母子手帳国際会議を主催したオランダ・ライデン大学のAnneke Keslerさん、日本WHO協会理事長の中村安秀さん、国際母子手帳委員会事務局長の板東あけみさんをはじめ、母子手帳への情熱を持った熱いメンバーが集まり、準備を進めていきました。開催にあたり、トロントのメディアを通じた案内の他、日本国内でも会議を案内し、広く参加を呼びかけました。

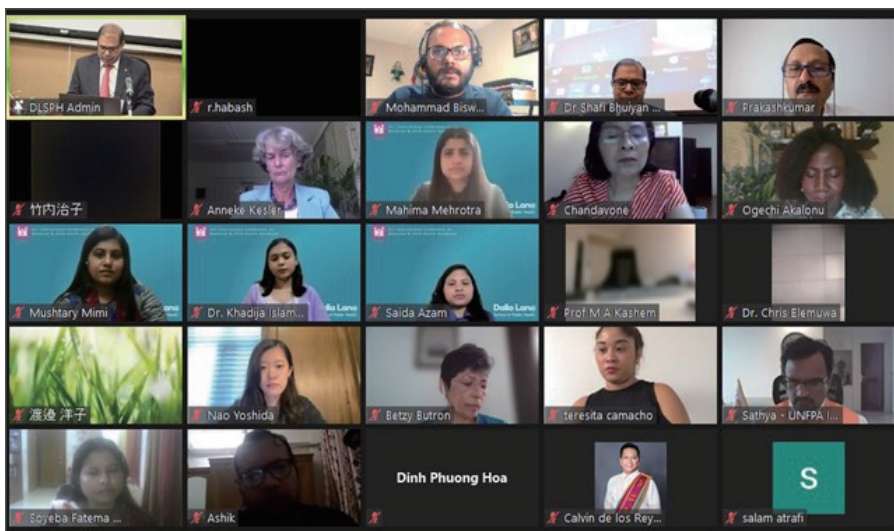
会議当日は、主催者のShafiさんを中心にトロントチームが現地で会議の運営を行い、中村さんとタイの国際母子手帳委員会メンバーのSarawut Boonsukさんが現地から参加して、各国の参加者とZOOMで繋がって開催されました。また、会議の様子はYoutubeで全世界にライブ配信され、オンラインでは、アジアやアフリカ、ヨーロッパ、アメリカの国々61か国から、両日合わせて1,000名を超えるアクセスがありました。

2日間にわたる会議は、今回の主催者であるShafiさんの挨拶から始まりました。開会式ではカナダ国歌が流された後、秋篠宮皇嗣妃殿下からビデオメッセージをいただきました。その後、トロント大学ダラ・ラナ公衆衛生大学院学長 Prof. Steini Brownさん、WHO事務局長特別アドバイザー Prof. Peter Singe、山本尚子WHO事務局長補、ユニセフ小児保健専門家 Dr. Anne Detjenさん、国連人口基金(UNFPA) Dr. Sathyanarayanan

第13回母子手帳国際会議・日程表（発表者敬称略）

2022年8月24日	
開会式	Shafi Bhuiyani、中村安秀、秋篠宮妃殿下、Adalsteinn Brown、Adalsteinn Brown、山本尚子 Anne Detjen、Sathya Doraiswamy、佐久間潤
基調講演	中村安秀、Miriam Khamadi Were、Anneke Kesler
各国の経験	インドネシア、パキスタン、オランダ、バングラデシュ、ガーナ、カナダ
研究報告	
ポスター発表	
閉会の挨拶	
2022年8月25日	
シンポジウム	バングラデシュ、ナイジェリア、国連パレスチナ難民救済事業機関、パレスチナ、ペルー、アフガニスタン
ダンスセッション	
全体会議	母子手帳を用いた好事例、デジタル母子手帳、母子手帳とCOVID-19、マイノリティを対象とした母子手帳
トロント宣言	
申込者の調査報告	
次回開催案内	
閉会式	

表1 第13回母子手帳国際会議日程表



オンライン（zoom）参加者の様子

Doraiswamy さん、国際協力機構（JICA）佐久間潤さんから、ご挨拶をいただきました。

1 日目は、開会式の後に基調講演、

Global Experience（世界のグローバルな現状）の報告がありました。基調講演では、日本から中村安秀さん、ケニアの Miriam K. Were さん、オランダの

Anneke Kesler さんが登壇されました。中村さんは「MCH Handbooks beyond Sustainable Development Goals (SDGs)」（持続可能な開発目標を超えた母子手帳）のテーマで、母子手帳の歴史や母子手帳が誕生した日本における利活用の状況、COVID-19 パンデミックによってプライマリーヘルスケアが再評価されていることやプラネタリーヘルスの視点について話されました。ケニアの Were さんは、コミュニティにおける母と子の健康を護るコミュニティボランティアの活躍・母子手帳の役割を語られ、オランダの Anneke さんは、「Early, earlier and earliest” MCH Handbook and the important themes of prevention, reaching even those who are not visible」（早く！母子手帳と予防の重要なテーマは見えないにも届く）をテーマに発表されました。

世界のグローバルな現状については、パキスタン、オランダ、バングラデシュ、ガーナ、カナダ、インドネシアの6か国の母子手帳の活用状況や母子保健の現状について報告がされました。各国の代表の方はカラフルなスライドをそれぞれの国から画面を共有しながら報告をされ、現地に集まったの対面の会議ではありませんでしたが、画面の向こうから熱い思いが伝わってきました。また、開催国のトロントチームが作られた今回までの母子手帳国際会議を振り返る動画や母子手帳に関する研究発表もありました。事前のアンケートでは、今回初めて母子手帳国際会議に参加された方が多かったこと

もあり、母子手帳についての理解を深めるような内容でした。

2 日 目 は、MCH HB Symposium: Expansion, Evaluation, Sustainability (母

子手帳の展開・評価・持続) シンポジウムと母子手帳に関する優れた実践例の報告がありました。シンポジウムではラオスの Chandavone Phoxay さんが司会

を行い、バングラデシュ、ナイジェリア、UNRWA、パレスチナ、ペルー、アフガニスタンから現状の報告がありました。各国の代表の方々はみんな、母子手帳について熱い思いを語られ、発表時間を過ぎる発表者もいましたが、私は2日間の会議の中でナイジェリアの方の発表が新鮮で、印象に強く残っています。ナイジェリアでは、様々な機関の支援を受けて母子保健サービスが行われていますが、母親（妊婦）と子どもそれぞれの健康記録カードを使用しているため、母子保健の改善のため母子手帳の導入が進められていました。現在進行形で母子手帳が作られている報告はとても新鮮で勢いを感じました。

続いて、母子手帳に関する優れた実践として、杉下智彦さんからアフリカの mHealth サービス、タイ公衆衛生省副総局長 Sarawut Boonsuk さんからは COVID-19 における母子手帳の役割、板東あけみさんからはリトルベビーハンドブックなどのサブブックの役割に関する報告がありました。誰ひとり取り残すことがないように、母子手帳がすべての子ども達の健康を護るツールとなっていけるように母子手帳のデジタル化やサブブックの開発等、母子手帳の活用も進化をしている様子が報告されました。

第 13 回母子手帳国際会議の Website (<https://conference.mchhandbook.com/>) では、母子手帳に関する研究発表のポスターが登録されており、日本やカナダ、バングラディッシュから 10 枚のデジタ



対面開催の様子



カナダ集合写真

ルポスターが掲載されています。
(<https://conference.mchhandbook.com/e-posters-2/>)。また、Websiteには、プログラムブックや発表者の紹介などのページもあり、会議の内容を詳しく見ることができます。

トロント宣言

2日間の母子手帳国際会議の締めくくりとして「すべての女性と子どもが見えるようにするトロント宣言」が採択されました。(表2)トロント宣言では、母子手帳にはEDI (Equity, Diversity, and Inclusion) の原則が取り入れられていることが強調されました。

公平性 (Equity) : 十分なサービスを受けていない人々に、質の高いケアへのアクセスを改善する。

多様性 (Diversity) : ボトムアップのアプローチにより、文化的配慮のあるサービスを提供する。

包摂 (Inclusion) : 低出生体重児、発達障害など特定のニーズに対応した医療サービスを提供する。

トロント宣言も第13回母子手帳国際会議のWebsiteで全文を読むことができます。

母子手帳国際会議のこれから

第13回の母子手帳国際会議は、COVID-19の影響を受けてオンラインを活用したハイフレックスでの開催となり、交通費の心配や長時間の移動をすること

トロント宣言 “Making Me Visible” (一部抜粋)

母子手帳にはEDIの原則が含まれる。

- 公平性 (Equity) : 十分なサービスを受けていない人々に、質の高いケアへのアクセスを改善する。
- 多様性 (Diversity) : ボトムアップのアプローチにより、文化的配慮のあるサービスを提供する。
- 包摂 (Inclusion) : 低出生体重児、発達障害など特定のニーズに対応した医療サービスを提供する。

表2 トロント宣言

なくそれぞれの生活の場から会議に参加が可能であったため、これまでの会議に比べて多くの国からたくさんの方が参加することができました。

COVID-19は、日本だけでなく世界で猛威を振るっており、世界の母と子の健康にも大きな影響を与えています。今回の母子手帳国際会議で様々な国の現在を報告していただいて、それぞれの国で母と子の健康を護る取り組みが継続して行われていて、母子手帳は大切な役割を果たしていました。

第14回の母子手帳国際会議は、2年後の2024年にフィリピン共和国マニラで開催されることが決定しました。オンライン会議はいつでもどこでもオンライン上で集まれる利点がありますが、実際に会うことで得られる感動もCOVID-19のパンデミックで移動に制限がかかり、対面で会い辛くなったことで逆に大切さを感じています。次回は現地マニラで、実際に各国の方々と一緒に集まって開催できることを心から願っています。



MCH Handbook YouTube動画のQRコード



第13回母子手帳国際会議WebsiteのQRコード